緊迫感あふれる救急現場を再現 ひとつでも多くの命を救いたい

「板橋区加賀2丁目、○○さん方で30代男性が意識不明。至急出動せよ」。1分1秒を争う救急現場に駆けつけ、ドクターの指示のもと迅速に処置を行い、患者を病院まで搬送する救急救命士という仕事。帝京大学板橋キャンパスにある実習室には、その仕事に向けて真摯に学ぶ医療技術学部スポーツ医療学科救急救命士コースの学生たちが集まっています。

学生たちは、患者、患者の家族、救急隊員、消防士、記録係といった役割にわかれ、実際の救急現場に基づいたシミュレーションに挑みます。リアルな緊迫感につつまれ、役割に没頭する学生たち。授業のシナリオを考案し指導する教員の一人、アメリカでの救命士経験を持つ成川憲司先生は、「高度な処置を行う際は、ドクターからの的確な指示を得るために状況を詳細に伝えなければならないと同時に、最善の処置を瞬時の判断で行うことが求められます。例えば、意識のある状態から急に心肺停止に陥るなど、現場で起こりうるさまざまな状況を想定した実習が必須」と話します。

授業では、まず先生が患者や患者の家族役の学生に、事故の状況を詳しくレクチャーすることから始まります。そして、患者役の演技がスタートすると、まだシナリオを知らない救急隊員や応援要請された消防士役の学生が駆けつけ、状況を確認しながら対処。その様子を、エバリュエーターと呼ばれる記録係の学生がチェックしていきます。この日のシナリオは、一度回復の様子を見せた患者が、一転して心肺停止状態になるというシチュエーション。家族役の学生がパニックに陥る演技や、救急隊員が汗を垂らしながら心臓マッサージをする緊迫感のある演技など、真に迫るものがあり、見ているだけでハラハラしてしまいます。一連の流れが終わった後は、全員でフィードバック。今回は特に、パニックに陥った家族へのフォローや、投与する薬の説明用語が難しすぎるなど、安心感を与えるという部分で課題が残りました。患者だけでなく、まわりの人たちのケアも救急救命士の大切な仕事のひとつなのです。

実際の救急現場では、救われる命がある一方で助けられない命があるのも事実。救急救命士への道は、医療技術を磨くだけでなく、メンタル面での成長も課題となります。「実習では完璧以上のものをめざしてほしい。ここで完璧以上にできなければ、実際の現場で活動することはできませんから」と成川先生。ひとつでも多くの命を救うための授業が、日々ここで繰り広げられています。

feel TEIKYO ft
あなたにつながる帝京大学 撮影・加瀬健太郎

帝京大学 本部広報課
TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします
帝京大学のあれこれを充実のコンテンツで紹介する冊子『feel TEIKYO』を配布中。
冊子請求先→ post@med.teikyo-u.ac.jp（本部 広報課）
スペシャルサイト→ www.feelteikyo.com